

平成 1 5 年度

独立行政法人国立美術館
国立国際美術館

事業報告書

目 次

国立国際美術館の概要	3
業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	4
国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	6
1. 収集・保管	6
(1) 美術作品の収集（購入・寄贈・寄託）の状況	6
(2) 保管の状況	8
(3) 修理の状況	9
2. 公衆への観覧	10
(1) 展覧会の状況	10
「常設展」	12
「嶋 剛 - もう一つの眼差し - 」展（企画展）	14
「高柳恵里」展（企画展）	16
「ヤノベケンジ - MEGALOMANIA - 」展（企画展）	18
「大地の芸術 クレイワーク新世紀」展（特別展）	21
「川崎 清 美術館建築とその周辺」展（企画展）	23
(2) 貸与・特別観覧の状況	25
3. 調査研究	26
4. 教育普及	27
(1) - 1 資料の収集及び公開（閲覧）の状況	29
(1) - 2 広報活動の状況	30
(1) - 3 デジタル化の状況	32
(2) - 1 児童生徒を対象とした事業	33
(2) - 2 講演会等の事業	34
(3) - 1 大学等との連携	36
(3) - 2 ボランティアの活用状況	37
(4) 渉外活動	38
5. 新たな美術館の運営に向けた取り組み	39
6. その他の入館者サービス	40

国立国際美術館の概要

1. 目的

当館は、昭和52年(1977年)に文化庁の施設等機関として設置された四つの国立美術館の一つで、日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術作品、その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関連する調査研究及び事業を行うことを目的としている。

展覧事業については、常設展示と企画展示(特別展、企画展、共催展、近作展)の二本立てで運営している。内容は、現代美術を中心に、日本美術の成立と発展が世界の美術のそれと密接な関係を有することを美術作品の展覧を通じ、系統的具体的に明らかにするものである。また、日本と世界の現代美術の新しい動向をわかりやすく展示している。

資料の収集については、日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術に関する作品・その他の資料のうち、現代美術(主に1945年以降)を重点的に収集している。

調査研究については、現代美術に関する基礎的調査研究、企画展示及び常設展示に関する調査研究のほか、世界の現代美術界の動向等の調査研究も行っている。

このほか、展覧事業の広報・普及、調査研究成果の公表、美術に関する講演会等の開催などの事業も行っている。

2. 土地・建物

建面積	4,469 m ²
延べ面積	10,902 m ²
展示面積 屋内	3,668 m ²
屋外	1,309 m ²
収蔵庫面積	332 m ²

3. 定員 16人

4. 予算 768,962,700円

5. その他

当館は、大阪・中之島への移転準備を進めるため、平成16年1月18日(日)をもって展覧事業を終了し、万博公園内の現施設を閉館した。

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

中期計画

- 1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き1%の業務の効率化を図る。
 - (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化
 - (2) 省エネルギー、廃棄物減量化、リサイクルの推進、ペーパーレス化の推進
 - (3) 講堂・セミナー室等を積極的に活用するなど施設の有効利用の推進
 - (4) 外部委託の推進
 - (5) 事務のOA化の推進
 - (6) 連絡システムの構築等による事務の効率化
 - (7) 積極的な一般競争入札を導入
- 2 外部有識者も含めた事業評価の在り方について適宜、検討を行いつつ、年1回程度事業評価を実施し、その結果は組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。

実績

1. 業務の一元化
これまで行っている一元化事務に加え、情報公開制度の共通的な事務を一元化した。
2. 省エネルギー等（リサイクル）
 - (1) 光熱水量
室温の年間常温（夏季27、冬季25）の励行や廊下・階段などの消灯によって、節電に対する職員の意識向上を図るとともに、節水についても周知等の徹底を図り、省エネルギー化に努めた。

ア. 電気	使用量	835,212kwh	（平成14年度比	93.57%）
	料金	21,471,348円	（平成14年度比	92.17%）
イ. 水道	使用量	2,543 m ³	（平成14年度比	90.02%）
	料金	819,544円	（平成14年度比	84.88%）
ウ. ガス	使用量	355 m ³	（平成14年度比	89.65%）
	料金	54,613円	（平成14年度比	112.13%）
 - (2) 廃棄物処理量
館内LANを利用した通知文書の発信や両面コピーの推進により、ペーパーレス化に努めた。
ただし、移転準備に伴い廃棄物が若干増加した。

ア. 一般廃棄物	11,180Kg	（平成14年度比	108.12%）	料金	240,714円	（平成14年度比	105.58%）
イ. 産業廃棄物	800Kg	（平成14年度比	- %）	料金	42,000円	（平成14年度比	- %）
 - (3) その他 古紙の再利用、OA機器のトナーカートリッジなどのリサイクルによる再生使用
3. 施設の有効利用
講堂の利用率 3%（12日/365日）

・講演会	7日
・ギャラリートーク	1日
・ワークショップ	4日
4. 外部委託

1 常駐警備業務	2 機械警備業務
3 清掃業務	4 看視業務
5 電気機械設備運転業務	6 昇降機設備保全業務
7 文書等運送業務	8 庶務課業務
9 情報システム保守業務	10 集配金取次業務
11 ミュージアムショップ運営業務	
5. OA化
館内LANの整備状況

館内LANを利用した情報の共有及びメールを利用した通知・連絡により、ペーパーレス化を図るとともに、事務の効率化を図った。

・紙の使用量 166,500枚（平成14年度比 120.65%）

A4判 150,000枚

A3判 16,500枚

6. 一般競争入札

一般競争入札 0件（総契約件数 54件）

平成15年度契約では、一般競争入札に付す案件はなかった。

ただし、土地借料、陳列品購入費、新館工事費を除く。

7. 評議員会，外部評価委員会

（1）評議員会

開催回数 1回（平成16年2月24日（火））

議事内容 平成15年度事業報告、平成16年度年度計画（案）

平成16年度予算概要、その他（新館進捗状況、評価結果の報告）

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

「1%の業務の効率化」目標については、平成14年度に引き続き十分達成することができた。

省エネルギー化については、館内職員に隔々まで効率化の精神が行き渡り、その結果、予想以上の成果を上げることができた。

当館では、新館移転を控えており、職員が一丸となって移転対応と現施設での通常業務に取り組み、可能な限りの業務運営の効率化を図りながら、効率化目標数値をクリアした。

【見直し又は改善を要する点】

省エネルギーのペーパーレス化については、館内LANの利用促進やコピー用紙の両面印刷など、できる限りの努力を行ったが、美術館という性質上、広報普及活動等におけるペーパー使用量をおさえることが、予想以上に困難であった。

今後も、業務運営の改善可能な事項の見直しに努め、効率化を引き続き推進していきたい。

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 収集・保管

(1) 美術作品の収集(購入・寄贈・寄託)の状況

中期計画

(1)-1 体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を図る。また、そのための情報収集を行う。

(国立国際美術館)

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集する。

(1)-2 収蔵品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている分野を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。

実績

1. 購入	137件				
2. 寄贈	347件				
3. 寄託	28件				
4. 陳列品購入費	予算額	223,928,700円	決算額	223,930,250円	

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画の収集方針に基づき、収蔵品の欠落部分を補い、陳列を体系的に充実させるため、美術作品等選考委員会及び評価委員会の審議を踏まえ、137点の美術作品を購入するとともに、寄贈作品についても同様の手続きを経て、当館にふさわしい作品として認められた347点について、寄贈受入を行うなど着実に作品収集を行った。

主な作品として、洋画では、ドイツを代表する画家ゲオルク・バゼリッツの初期の代表作《ケーニツヒ夫妻の肖像》(1970-71)と、同じくドイツの画家で過去に当館で個展を開催したことのあるヨルク・インメンドルフの近作《絵が呼んでいる(最後の自画像)》(1998)の2点を収蔵した。また、1960-70年代の日本の絵画を検証する意味で、菅井汲の《オートルート 12》(1965)と中西夏之の《エメラルドの台座 1》(1972)を収蔵した。さらに、これまでも収蔵対象としてきた「もの派」の動向を充実させる作品として、高松次郎の《紙の単体》(1971)と彫刻《大理石の単体》(1971)、それに李禹煥の初期版画《点より》《線より》(1979)を収蔵した。

彫刻では、90年代以降の新たな動きを示す作品として、シュテファン・バルケンホル(ドイツ)の木彫《赤いシャツとグレーのスボンの男》(1991)とキキ・スミス(アメリカ)のガラス作品《露の虹》(1999)などを収蔵した。

また、近年収集対象としての重要性がますます増している写真の分野では、現代写真の草分けであるベルンハルト&ヒラ・ベッヒャー(ドイツ)の《冷却塔》(1986)や近年日本でも個展を開いたフランスのジャン＝マルク・ピュスタモントの大作《L.P.》(2000)、その他、畠山直哉と森村泰昌の初期写真を収蔵した。

版画の分野では、瑛九、泉茂、吉原英雄、池田満寿夫ら戦後を代表する版画家の作品、同様にデザインの分野では昨年に引き続き横尾忠則のポスターを多数収蔵した。

さらに、当館で開催した展覧会の出品作から、嶋剛、高柳恵里、ヤノベケンジの作品を収蔵した。

なお、寄贈・寄託は収蔵作品の欠落を補う有効な方法であり、積極的にその推進に努めたところであるが、今後もさらにその推進方策を検討していきたい。

* 添付資料

収集した美術作品件数の推移（事業実績統計表 p.1）

寄託された美術作品件数の推移（事業実績統計表 p.2）

購入・寄贈美術作品の一覧（事業実績統計表 p.71）

(2) 保管の状況

中期計画

(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世へ伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵品を適切な環境で管理・保存する。また、保存体制の整備・充実を図る。

(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。

実績

1. 温湿度

展示会場

空調実施時間 9:30~17:00

温度 夏季 25、冬季 20 湿度 夏季、冬季 50%

* 入館者が入ったときの温湿度管理について

定期的な温湿度のデータ分析により、適宜対応してきた。

* 24時間空調を行わない理由

昼夜における温湿度の変化が小さいことと、現代美術という温湿度変化の影響を比較的受けにくい作品が中心であるため。

収蔵庫

空調実施時間 9:30~17:00

温度 夏季、冬季 22 湿度 夏季、冬季 55%

* 24時間空調を行わない理由

収蔵庫が地階にあり、昼夜における温湿度の変化が小さく、作品に与える影響が少ないため。

2. 照明

館内数十ヶ所で継続的な調査を行い、必要に応じた改善を行ってきた。

3. 空気汚染

館内数十ヶ所で継続的な調査を行い、必要に応じた改善を行ってきた。

4. 防災

監視カメラの設置及び警備員による定期巡回等、必要に応じた対策を行ってきた。

5. 防犯

監視カメラの設置及び警備員による定期巡回等、必要に応じた対策を行ってきた。

6. その他

年間を通じた適正な温湿度の管理により、作品の保存環境の整備に努めてきた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館では、現代美術という温湿度変化の影響を比較的受けにくい作品が中心であることと、収蔵庫が地階にあるため昼夜における温湿度の変化も小さいことから、24時間空調を行っていないが、定期的な温湿度のデータ分析により、適正な保存環境の維持に努めてきた。

なお、保存カルテの作成については、今後も継続的に検討していきたい。

【見直し又は改善を要する点】

現施設における空調設備の監視装置が老朽化しており、温湿度の管理は有人監視による管理を行ってきた。新館移転を控え装置の機器更新は行っておらず、現状の装置で無人運転(24時間空調)の監視を行うには、制御機能の信頼性に乏しく、突発的な事故等が懸念されることから24時間空調は行っていなかった。

新館においても、展示場及び収蔵庫が地下に位置することに変わりはないが、24時間空調システムを完備しているため、必要に応じた万全の温湿度管理を行い、作品の保存環境の整備に努めていく予定である。

(3) 修理の状況

中期計画

(3)-1 修理、保存処理を要する収蔵品等については、保存科学の専門家等との連携の下、修理、保存処理計画をたて、各館の修理施設等において以下のとおり実施する。

緊急に修理を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから各分野ごとに計画的に修理を実施。

伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れて実施。

(3)-2 国内外の博物館等の修理、保存処理の充実に寄与する。

実 績

1. 洋画	1件		
版画	7件		
工芸	1件		
2. 修理経費	予算額	5,000,000円	決算額 4,992,601円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画に基づき、緊急に修理を必要とするものから計画的に修理を行った。

特に、平成15年度から受け入れた紙の修復を専門とする客員研究員と共同で、移転前の作品状態のチェックを行い、修理に向けた優先順位や保存状態が確認できたことは、移転作業の準備を進めるうえで大変有意義であった。

【見直し又は改善を要する点】

これまでの修理点数も少ないことから、データベース化には至っていないが必要性は認識しており、法人内での統一した取り扱いを含め、今後も継続的に検討していきたい。

また、客員研究員とのさらなる連携強化を図り、計画的に作品の修理を行っていきたい。

*添付資料

修理した美術作品件数の推移（事業実績統計表 p.3）

修理した美術作品の一覧（事業実績統計表 p.95）

2. 公衆への観覧

(1) 展覧会の状況

中期計画

- (1)-1 国民のニーズ、学術的動向等を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。
- (1)-2 常設展においては、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとするとともに、最新の研究結果を基に、美術に関する理解の促進に寄与する展示を実施する。
- (1)-3 企画展等においては、積年の研究成果の発表や時機に合わせた展示を企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、国民のニーズに対応した展示を実施する。企画展等の開催回数は概ね以下のとおりとする。なお、実施にあたっては、国内外の美術館及びその他の関連施設と連携を図るとともに、国際文化交流の推進に配慮する。

(国立国際美術館)

年5～6回程度

- (1)-4 展覧会を開催するにあたっては、開催目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努力する。
- (1)-5 各館の連携による共同企画展、巡回展等の実施について検討し推進する。
- (1)-6 収蔵品の効果的活用、地方における鑑賞機会の充実を図る観点から、全国の公私立美術館等と連携協力して、地方巡回展を実施する。
なお、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の入館者数となるよう努める。
また、公立文化施設等と連携協力して、収蔵映画による優秀映画鑑賞会を実施する。
- (2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に推進する。
- (3) 入館者数については、各館で行う展覧会ごとに、その開催目的、想定する対象層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境、広報活動、過去の入館者数の状況等を踏まえて目標を設定し、その達成に努める。

実績(総括表)

1. 常設展
展示替 4回
2. 特別展・企画展 5回
中期計画記載回数：年5～6回
「鳴剛 - もうひとつの眼差し - 」展
「高柳恵里」展
「ヤノベケンジ - MEGALOMANIA - 」展
「大地の芸術 クレイワーク新世紀」展
「川崎清 美術館建築とその周辺」展
3. 入館者数 44,685人(目標入場者数 30,000人)
4. 展覧会開催経費 予算額 25,849,730円 決算額 26,121,228円
5. その他
現施設での最終活動年度という話題性もあって、入館者数は目標入場者数を大きく上回った。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

現代美術という集客に結びつきにくい分野ではあるが、企画・内容等に工夫を凝らし、広く国民に優れた美術作品を観覧する機会を与えるよう努めた。特に常設展では、平成14年度から実施して好評を得たテーマを設定した特集展示を継続して行うなど、可能な限り多くの所蔵品を紹介するよう努めた。

各展覧会ごとに行うポスター・チラシ及びホームページによる広報活動はもちろんのこと、企画によっては万博公園外周道路に展覧会広報用の横断幕を掲出するなど、積極的な広報活動を行い入館者数の増加に努めた。

また、現施設での最終年度にあたることから、「ヤノベケンジ - MEGALOMANIA - 」展、「川崎清

美術館建築とその周辺」展など、万博の地ならではの企画展を開催した。

【見直し又は改善を要する点】

大阪市内中心部への移転後は、都市型の美術館として多くの人々に観覧してもらえよう、展覧会の企画や広報・宣伝活動に工夫を凝らし、これまで以上の入館者数増加を目指し、積極的に取り組んでいきたい。

「常設展」

方 針

受託品を含む館蔵品の中から定期的に展示替えを行い、第二次世界大戦後の日本及び欧米の現代美術について、可能な限り多くの作品を紹介することを目的としている。

実 績

1. 開会期間
平成15年 1月 9日～平成15年 4月 1日 (72日間/うち平成15年度1日間)
平成15年 4月 3日～平成15年 5月27日 (49日間)
平成15年 5月29日～平成15年 9月23日 (102日間)
平成15年 9月25日～平成16年 1月18日 (93日間)
計 316日間(平成15年度合計 245日)
(常設展のみの開催期間 36日間)
2. 会 場
地階、1階、2階展示場
3. 出品点数
115件
95件
110件
93件
延 413件
4. 入館者数
44,685人(目標入場者数 30,000人)
うち常設展のみの入館者数 4,941人(目標入場者数 2,000人)
5. 入場料金
大人420円、大学生130円、高校生70円
大人(団体)210円、大学生(団体)70円、高校生(団体)40円
6. 入場料収入
(常設展のみの入場料収入の合計 210,620円)(目標入場料収入 235,000円)
7. 決 算 額 1,922,066円
8. アンケート調査(企画展等のアンケートに含めて実施している。)
(については平成14年度開催分であり、常設展に関するアンケートは実施していない。)
調査期間 平成15年 4月10日～平成15年 4月13日(4日間)
平成15年 8月 7日～平成15年 8月10日(4日間)
平成15年10月 9日～平成15年10月12日(4日間)
調査方法 入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。
アンケート回収数 284件
327件
718件
アンケート結果 ・良い 54%(154件)・普通 42%(119件)・悪い 4%(11件)
・良い 58%(189件)・普通 34%(112件)・悪い 8%(26件)
・良い 48%(342件)・普通 47%(340件)・悪い 5%(36件)
9. その他
常設展の充実を図るため、平成14年度に引き続きテーマを設定した特集展示を行うなど、企画・内容等について十分な検討を行い、可能な限り多くの所蔵品を紹介するのみならず、魅力的な展示になるよう努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

年間を通じ、当館の所蔵品を常設展示として広く一般の観覧に供している。年間4回程度の展示替えを行うことで、より多くの作品を展示することを心がけているが、さらに、現代美術は難解であるとの声に積極的に対応するため、平成14年度実施して好評を得たテーマを設定した特集展示を継続して行った。平成15年度は「美術と物語」、「もの派」、「80年代以降の日本の美術」、「万国博覧会から開館の頃まで」と題し、それぞれ現代美術における物語性、戦後日本美術の中で重要な動向の諸相、現在に直接つながる近い過去の美術活動の紹介、万博公園内の最後の常設展であることを考慮しての1970年の万博から77年の開館期の美術をテーマとした特集展示を行ったが、これら特集展示は、観覧者の現代美術への理解の助けになるばかりでなく、このような展示を通して、観覧者が当館の作品収蔵方針を明確に理解できる点においても好評であったので、今後も続けていきたいと考えている。

【見直し又は改善を要する点】

新館では、常設展示のさらなる充実を図り、展示作品の選定や作品の展示方法等に工夫を凝らし、現代美術に対する理解を高めるよう努めていきたい。

「鳴 剛 もうひとつの眼差し」展（企画展）

方 針

鳴剛は、1970年代後半から、日本の現代美術領域に於いて注目を集め、特にアメリカのスーパー・リアリズムが紹介されたことと並行して脚光を浴びることとなったが、逆にその動向が終局すると共に紹介される機会を失っていた。しかしながら、鳴の制作行為は、スーパーリアリズム的な行為とは別に、絵画を描くことが否定されていた時代に「写真を描く」という絵画に残されていた選択肢を見出した点に独自性があった。鳴のような独自の展開を辿った作家に焦点を充てることによって、1970年代後半から1980年代中頃にかけての日本の現代美術にも多様性が在ったことを広く認知していただくことを目的とした。

実 績

1. 開会期間	平成15年 4月 3日～平成15年 5月18日（41日間）	
2. 会 場	国立国際美術館	
3. 主 催	国立国際美術館	
協 賛	（財）ダイキン工業現代美術振興財団	
4. 出品点数	63件	
5. 入館者数	6,058人（目標入場者数 4,000人） 万博公園内に位置することから、行楽に適した時期に展覧会が開催されたこと、会期中に無料入館日が3回あったこと、いわゆるリアルな理解しやすい作品であったことなどが、目標を大幅に上回った理由と考えられる。	
6. 入場料金	大人420円、大学・高校生130円、大人（団体）210円、大学・高校生（団体）70円	
7. 入場料収入	794,310円（目標入場料収入 492,000円）	
8. 担当した研究員数	1人	
9. 展覧会の内容	写真とその写真を描く行為を反復した初期作品から、多重露光や映像のブレを素材として写真の視覚に注視した作品、描く対象を都市から自然に移し自然風景が写真の粒子と化した状態をより高精度に再現した作品、さらに近年の文化人類学的見地によって構成された作品に至るまで、代表的な作品60点余りによって鳴剛の絵画世界の全体を初めて本格的に紹介した。	
10. 講演会等	3回 参加人数 320人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）	
11. 広報	プレスリリースの発行、交通広告（JR、地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出）、美術館等へのポスター・チラシの配布	
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等		
神戸新聞	4月11日	三上喜美男
京都新聞	4月12日	深萱真穂
読売新聞	5月 2日（夕）	木村未来
朝日新聞	5月10日（夕）	森本俊司
産経新聞	5月14日（夕）	
新美術新聞	5月1・11日合併号	
文化庁月報	3月号	中井康之
月刊マナビィ	4月号	中井康之
大阪人	6月号	植木（サントリーミュージアム学芸員）
大阪人	7月号	植木（同上）
月刊あれこ	9月号	岡本光博
新日曜美術館	4月27日	
13. アンケート調査		
調査期間	平成15年 4月10日～平成15年 4月13日（4日間）	
調査方法	入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。	
アンケート回収数	290件	
アンケート結果	・良い 68%（199件）・普通 31%（89件）・悪い 1%（2件）	

14. その他

広報に際しては、リアルでカラフルな作品を多用し、現代美術は難解であるとの先入観を抱いている層から小中学生にまで足を向けて貰えるように努めた。

内容の理解に対しては、「写真を描く」という行為が、どのような立脚点から展開されたのかを理解して貰うために、作品に対する作者自身の言葉をパネル化して掲示した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

リアルな表現をしている作品を広報媒体にすることによって、現代美術に親しみのない多くの一般の美術ファンにも足を運んでいただけた。そのような、普遍的に人々が共有する、対象に対する相似性という美への共感によって実物の作品と対峙し、実際に展示会場に並べられた等身大の巨大な鳴作品と向かい合うことによって、複製技術化された映像と、美術作品との差異を実感していただける機会となったと考える。

上記した複製技術化された映像を、(読点削除)手で描くことの意味性を、(読点挿入)作家自身の言葉を引用してパネル化し、作品への理解となるような工夫を凝らした。

【見直し又は改善を要する点】

作品理解の一助となるように、講演会を構成することが通例であるが、展覧会に広がりを持たせるために「風景の哲学」を展開する桑子敏雄と作家との対談を企画したが、対談を聴取する側への説明が不十分だったため、未消化の形で終わったのが残念である。

「高柳恵里」展（企画展）

方 針

質の高い創作活動を継続して行っている比較的若い美術家を、個展という形式で紹介することによって、一般の人々に対し、新しい才能を丁寧に伝える試みの一つとして企画した。

実 績

1. 開会期間 平成15年 5月29日～平成15年 7月21日（47日間）
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館
協 賛 （財）ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数 31件
5. 入館者数 4,257人（目標入場者数 4500人）
万博公園という行楽地に位置するものの、最寄り駅から決して近くない当館の来館者数は、天候によって大きく左右されるところであるが、展覧会開催期間は梅雨の時期と重なり、天候の悪い日が多かった。このことが、目標入場者数をわずかに下回った大きな理由と考えられる。
6. 入場料金 大人420円、大学生130円、高校生70円
大人（団体）210円、大学生（団体）70円、高校生（団体）40円
7. 入場料収入 565,430円（目標入場料収入 554,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
1990年頃に、日本の現代美術界において知られるようになった美術家で、以後も継続的に作品を発表し常に注目され続け、今日では同世代の美術家を代表する一人ともいべき高柳恵里の、1999年以降の近作30点に新作1点を加えて紹介した。
10. 講演会等
2回 参加人数 194人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告（JR、地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出）、美術館等へのポスター・チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

神戸新聞	6月 6日	三上喜美男
朝日新聞	6月20日（夕）	森本俊司
京都新聞	6月21日（夕）	深萱真穂
日本経済新聞	6月23日（夕）	加藤義夫
産経新聞	7月 9日（夕）	早瀬廣美
読売新聞	7月15日（夕）	木村未来
ぴあ関西版	6月30日号	
	7月14日号	
	7月28日号	
e t c .	4月号	高柳恵里×斎藤一典
月間ギャラリー	5月号	
月間ギャラリー	6月号（新・作家への道標101）	
月間サヴィ	8月号	山下里加
北急だより ザ・ポールスター No. 218		
上方倶楽部（NHK教育）	6月19日	袁 豊

13. アンケート調査

調査期間 平成15年 6月12日~平成15年 6月15日(4日間)

調査方法 入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。

アンケート回収数 259件

アンケート結果 ・良い 36%(93件) ・普通 49%(127件) ・悪い 15%(39件)

14. その他

過去10年以上にわたり、頻繁にグループ展で紹介されてきた美術家の作品を、初めて個展として見せることによって、その個性的な創作活動について、これまで以上に深く考える場を提供した。

自己点検評価**【良かった点、特色ある取組み】**

出品作品を必要十分な数まで絞り込むとともに、広い展示場を有効に活用することによって、出品作品それぞれとゆっくりと向き合える展示環境を提供した。

これによって、各作品を深く味わい、ひいては作家の創作活動全般について、考える機会を提供できた。

【見直し又は改善を要する点】

美術館における初めての個展でありながら、わずか6ページの印刷物しか制作できず、来館者に十分な資料を提供することができたとは言い難い。

今後は、個展の場合であっても、より充実した印刷物を提供できるように検討していきたい。

「ヤノベケンジ MEGALOMANIA」展（企画展）

方 針

当館が、万博跡地の建物で展覧会を行う最後の年に、その万博跡地を芸術制作の原点とした作家ヤノベケンジの展覧会を行うことの意義は大きいと考えて企画した。それは、移転前の美術館を飾るにふさわしいとともに、ヤノベの展覧会を行う場所としても最適の場所であったからである。国内外で活躍するヤノベは、様々な場所で展覧会に出品しているが、大阪万博跡地は彼にとって特別の場所であり、その意味で本展覧会は内容も含めて別の場所では実現不可能な貴重な展覧会であった。

実 績

1. 開会期間 平成15年 8月 2日～平成15年 9月23日（46日間）
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館
協 賛 資生堂、キリンビール株式会社、（財）ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数 37件
5. 入館者数 12,562人（目標入場者数 6,000人）
展覧会開催中に夏休み期間を含み、車や列車、ロボットなどをモチーフとした、子どもにも親しみやすい作品が多かったことから、予想の2倍を上回る入館者数となった。
6. 入場料金 大人420円、大学生130円、高校生70円
大人（団体）210円、大学生（団体）70円、高校生（団体）40円
7. 入場料収入 2,509,730円（目標入場料収入 738,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
地元大阪出身の作家ヤノベケンジの個展。国立国際美術館が立地する大阪万博跡地を幼少期の遊び場として過ごした作家が、その創造の原点ともなった万博をテーマに、初期作品から最新作まで展示した。万博の頃に作家自身が夢見た未来への思いを、今の子どもたちに受け継いでもらおうという目的をもって企画した。
10. 講演会等
3回 参加人数 290人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告（JR、地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出）、美術館等へのポスター・チラシの配布、万博公園外周道路に展覧会広報用の横断幕を掲出
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

日本経済新聞	7月31日（夕）	
赤旗新聞	8月10日	
毎日新聞	8月12日	岸 桂子
日本経済新聞	8月17日	白木 緑
京都新聞	8月23日	太田垣實
The Daily Yomiuri	8月28日	Hiroyuki Ueda
産経新聞	9月 3日（夕）	早瀬廣美
読売新聞	9月 5日（夕）	木村未来
朝日新聞	9月13日（夕）	森本俊司
L U C A	第3号	
文化庁月報	7月号	平芳幸浩
神戸ウォーカー	7月23日号	
Lマガジン	7月25日号	植松琢磨

デザインの現場	8月号	
KANSAI Scene	8月号	
Kansai Time Out	8月 1日	Christopher Stephens
関西ウォーカー	8月 5日	
an関西版	8月 7日	みっちー福島
ぴあ関西版	8月 8日	古川 誠
htwi	8月10日	
BRUTUS	8月15日	大池明日香
婦人公論	8月22日	橋本麻里
salida関西版	8月25日	
KANSAI 1週間	第116号	
月刊シュシュ関西	9月号	
装苑	9月号	
メイプル	9月号	鈴木カオル
Meets Regional	9月号	岡山 拓
Invitation	9月号	佐々木芳郎
Examiner	9月号	
美術の窓	9月号	
月刊美術	9月号	
月刊マナビィ	9月号	平芳幸浩
ぴあ関西版	9月 8日	
美術手帖	10月号	ヲダ・マサノリ
Casa Brutus	10月号	Housekeeper
Dazed & Confused	10月号	白坂ゆり
賞とるマガジン	10月号	小山登美夫
商店建築	10月号	原 久子
映像 '03 (毎日放送)	8月17日	
新日曜美術館アートシーン (NHK総合)	8月31日	
楽園図鑑 (毎日放送)	9月2日	

13. アンケート調査

調査期間 平成15年 8月 7日~平成15年 8月10日(4日間)

調査方法 入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。

アンケート回収数 335件

アンケート結果 ・良い 72%(242件) ・普通 26%(88件) ・悪い 2%(5件)

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

ヤノベの創作の原点である場所で、その活動の集大成とも言えるべき展覧会ができたことは意義深い。また、夏休み期間中の開催であったことから、子どもたちが楽しく現代美術に触れる機会となり、結果的に目標入場者数の2倍を上回る人々に見てもらうことができた。さらに、会期中は頻繁に関連行事を行い、入館者増に努めた。行事としては、通常の講演会やギャラリートーク以外に、入館者に作品を実際に体験してもらいイベントを毎週行い、特に若い人たちや子どもたちに好評で、整理券を発行して実施にあたらなければならないほどであった。

様々なイベントを実施するなかで、当館のインターンやボランティアに対して、多くの活動の場が提供できたことも意義深い。

また、本展覧会の特別な意味（万博跡地での開催）や、展覧会の重要性が広く認知され、非常に多くの新聞・雑誌やテレビに取り上げられたことも特筆すべき点である。

「大地の芸術 クレイワーク新世紀」展（特別展）

方 針

現代社会においては、土という素材自体がひとつの強いメッセージとなりうるのではないかという観点から、クレイワークのもつ多様な表現力に注目し、その紹介に努めた。さらに、クレイワークと呼ばれる作品が、やきものとしての制作プロセスや工芸的に卓越した技術力と現代美術としての造形性との関係から、どのように認識されるのかという問題を設定し、美術表現のあり方を改めて問い直す機会となることを企図した。

実 績

1. 開会期間 平成15年10月 9日～平成15年11月25日(42日間)
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館
協 賛 (財)ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数 59件
5. 入館者数 9,365人(目標入場者数 8,500人)
本展覧会は、館単独の主催事業であったが、各出品作家が関係機関への事前広報活動を行ったこと、また、会期中の無料日にチラシを利用した広報を行うなど、積極的な広報活動を展開したことが、目標入場者数を上回った主な要因である。
6. 入場料金 大人830円、大学生450円、高校生250円、
大人(団体)560円、大学生(団体)250円、高校生(団体)130円
7. 入場料収入 1,174,740円(目標入場料収入 2,281,000円)
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
現代美術における素材としての土に注目し、土による表現(クレイワーク)の可能性について、独創的な創作活動を展開する9名の日本人作家(井上雅之、鯉江良二、重松あゆみ、杉山泰平、西村陽平、日野田崇、星野暁、前田晶子、三島喜美代)を取り上げ、その最新の試みを紹介した。
10. 講演会等
4回 参加人数 534人(詳細は「教育普及」講演会等欄へ)
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告(JR、地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出)、美術館等へのポスター、チラシの配布
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

赤旗新聞	10月 5日	
中日新聞	10月16日(夕)	
京都新聞	10月18日	太田垣實
読売新聞	10月18日(夕)	芥川喜好
産経新聞	10月19日	早瀬廣美
日本経済新聞	10月23日(夕)	富田律之
朝日新聞	11月 8日(夕)	森本俊司
読売新聞	11月11日(夕)	木村未来
中日新聞	11月19日	高満律子
文部科学時報	9月号	安來正博
文化庁月報	9月号	安來正博
美術手帖	10月号	
VISA	10月号	

書道界	10月号
Arch	10月号
博物館研究	10月号
陶業時報	10月 5日号
Web Designing	11月号
ぴあ	11月17日号
炎芸術	No. 75
炎芸術	No. 76
美庵	23号

13. アンケート調査

調査期間 平成14年10月10日～平成14年10月13日(4日間)

調査方法 入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。

アンケート回収数 733件

アンケート結果 ・良い 48%(353件) ・普通 48%(353件) ・悪い 4%(27件)

14. その他

いわゆる陶芸というイメージとは異なる作品群であったにもかかわらず、来館者に対して展示は概ね好評であった。また、野外展示や現地制作も試みるなど、クレイワークというジャンルの新しい可能性についても積極的に開拓していく姿勢を示すことができた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

出品作品は、いずれも9名の作家の近作ないしは新作に絞り、また、作品は単体としてのものからインスタレーション的なものまで幅広い傾向のものを集めた。その結果、個々の作家ごとのクレイワークに対する認識の違い、土との関係の多様性が浮き彫りになった。展示方法としては、各作家ごとにスペースを区切り、各自が展示プランの段階から構想しながら組み立てていく個展形式の展観にすることによって、個々に刺激的な展示空間を現出させた。また会期中には、展示会場で鯉江良二氏の制作風景を撮影したビデオを上映。関連イベントとして出品作家2名による対談や講演会の他、日野田崇氏による子どものためのワークショップを開催するなど、クレイワークに対する理解を促す、さまざまな教育普及活動を展開した。

【見直し又は改善を要する点】

当館でクレイワークをテーマとした展覧会は1995年以来のことであるが、クレイワークという言葉自体に対する世間の認知度が依然低く、広報活動等でも事前にそれを十分に周知させることができなかった。また、壊れやすいという作品の性質上、若干の展示効果を損ねてまで作品保護をしなければならず、作家の十全な意図を取り入れられなかった点も反省される。

「川崎 清 美術館建築とその周辺」展（企画展）

方 針

1960年代の初め頃から建築家として活躍を続ける川崎清は、長い年月にわたって数多くの重要なプロジェクトを手がけており、特に、日本万国博覧会では、お祭り広場の正面に位置する万国博美術館（現・国立国際美術館）を設計し、階段状に構築された自然光を調整するためのガラスのルーバーや、ピンポイントで支えられた全面ガラスの壁面など、画期的なアイデアを駆使した新しい美術館として注目を浴びた。

国立国際美術館は大阪市内への移転を控え、万博公園内の建物使用は本展をもって終了するため、川崎清のこれまでの業績に焦点を当てながら、とりわけ彼の美術館・博物館建築（国立国際美術館 / 栃木県立美術館 / 京都市美術館収蔵庫 / 相国寺承天閣美術館 / 京都大学博物館）に対する姿勢、思想を探り、併せて近年のプロジェクト（みやこめっせ、栗東芸術文化会館、鳥取環境大学等）についても紹介した。

実 績

1. 開会期間 平成15年12月 4日～平成16年 1月18日（33日間）
2. 会 場 国立国際美術館
3. 主 催 国立国際美術館
協 賛 （財）ダイキン工業現代美術振興財団
4. 出品点数 110件
5. 入館者数 7,502人（目標入場者数 5,000人）
建築展ということから事前広報のターゲットが絞りがやすかったことと、万博公園内における現施設での最後の展覧会ということから、各種メディアでも取り上げられ、幅広く関心を集めたことが、目標入場者数を大幅に上回った理由と考えられる。
6. 入場料金 大人420円、大学生130円、高校生70円
大人（団体）210円、大学生（団体）70円、高校生（団体）40円
7. 入場料収入 541,900円（目標入場料収入 615,000円）
8. 担当した研究員数 1人
9. 展覧会の内容
1970年の日本万国博覧会において、万国博美術館（現・国立国際美術館）を設計した建築家である川崎 清の美術館・博物館建築に対する姿勢、思想を探り、併せて近作も紹介した。
10. 講演会等
3回 参加人数 781人（詳細は「教育普及」講演会等欄へ）
11. 広報 プレスリリースの発行、交通広告（JR、地下鉄駅構内公共情報コーナーへのポスター掲出）、美術館等へのポスター・チラシの配布、万博公園外周道路に展覧会広報用の横断幕を掲出
12. 展覧会関連新聞・雑誌記事等

日本経済新聞	12月11日（夕）	
神戸新聞	12月19日	
日本経済新聞	12月22日（夕）	加藤義夫
読売新聞	12月24日（夕）	木村未来
京都新聞	12月27日	（太）
産経新聞	12月27日	（早）
朝日新聞	1月 7日	森本俊司
毎日新聞	1月 9日（夕）	岸 桂子
大阪日日新聞	1月21日	
Yomiuri Weekly	12月 7日号	

文化庁月報	11月号	
博物館研究	11月25日号(No.426)	
月刊ギャラリー	12月号	
月刊マナビィ	12月号	
ぴあ関西版	12月15日号	古川 誠
博物館研究	12月25日号(No.427)	
美術手帖	1月号	
イグザミナ	1月号	
エルマガジン	1月号(No.336)	岡山 拓
ぴあ関西版	1月26日号	古川 誠
関西ウォーカー	No.25	
Cabiネット	No.40	

13. アンケート調査

調査期間 平成15年12月11日～平成15年12月14日(4日間)

調査方法 入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。

アンケート回収数 486件

アンケート結果 ・良い 51%(246件) ・普通 45%(221件) ・悪い 4%(19件)

14. その他

会期中、京都造形芸術大学通信教育部学習会「大阪クラブ」による撮影会、アンケート実施に協力した。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

今回は国立国際美術館という建物自体が出品作品の一つとして捉えられたため、普段は見過ぎてきたような、この建物の特色、高く吹き抜けた斜め天井や、よく考え抜かれた動線、外部と内部の繋がりを意識したガラス壁面等に改めて注目することができ、それによって美術館建築の担う機能と役割についての再考が促された。展示自体も模型の再現とカラー写真パネル、図面パネル等を組み合わせることによって、全体として分かりやすく、すっきりと親しみやすいものとなった。

70年万博というものを振り返る良い機会でもあり、またこの建物との別れを惜しむ意味でも幅広い年齢層の観客が訪れ、会場で資料を熱心に読む姿も見られた。また、建築をこれから学ぼうとする人々に向けての広報活動も積極的に行い、その結果、個人だけでなく学生の団体の来館も目立った。夕方以降は外壁ライトを連日点灯させ、夕間に浮かび上がる幻想的な光の箱を、作品の一つとして楽しんでもらった。

【見直し又は改善を要する点】

講演会や対談の際、参加人数が多く椅子が足りなかったり会場に入りきらないという状態が発生し、会場内には熱気がこもり、換気が必要であった。あらかじめ多数の参加者が見込まれる場合は、サテライト中継を準備するなど、あらかじめの配慮が必要となるだろう。今後の課題としたい。

(2) 貸与・特別観覧の状況

中期計画

(2) 収蔵品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の博物館・美術館その他これに類する施設に対し、貸与及び特別観覧を積極的に推進する。

実績

1. 貸与・特別観覧の件数

貸 与 37件(885点)

特別観覧 9件(14点)

2. その他

優れた現代美術作品の相互活用を推進するため、他館からの要望に幅広く応えるよう努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

他館からの作品貸与依頼は引き続き多く、優れた現代美術作品の相互活用を推進すると同時に、当館の所蔵品をできる限り広く観覧に供するため、その要望には積極的に応えるよう努めた。同じく海外の美術館2館からの貸与依頼に対しても積極的な対応を行った。平成15年度は、平成14年度に引き続き当館で企画した「浜口陽三展」の巡回があり、当館所蔵の約270点の浜口作品が、国内3ヶ所の美術館において観覧に供されることとなったため、貸与点数が大幅に多くなった。

【見直し又は改善を要する点】

貸与・特別観覧の料金について、見直しに向けた検討を指摘されているが、今後、法人全体の課題として、他の公私立美術館や博物館の実情を精査しながら検討を進めていきたい。

*添付資料

貸与件数の推移(事業実績統計表 p.8)

特別観覧件数の推移(事業実績統計表 p.9)

3. 調査研究

中期計画

(1)-1 調査研究が、収集・保管・修理・展示、教育普及その他の美術館活動の推進に寄与するものであることを踏まえ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設及び研究機関とも連携等を図りつつ、次に掲げる調査研究を積極的に実施する。

- <1> 収蔵品に関する調査研究
- <2> 美術作品に関する調査研究
- <3> 収集・保管・展示に関する調査研究
- <4> 美術史、美術動向、作者に関する調査研究
- <5> 世界の映画作品や映画史に関する調査研究等

(1)-2 国内外の美術館・博物館その他これに類する施設の職員を、客員研究員等の制度を活用し招聘し、研究交流を積極的に推進する。

(2) 調査研究の成果については、展覧会、美術作品の収集等の美術館業務に確実に反映させるとともに、研究紀要、学術雑誌、学会及びインターネットを活用して広く情報を発信し、美術館に関連する研究の振興に供する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

実績

1. 調査研究

(1) 現代美術の調査研究

日本の現代美術に関する調査研究
海外の現代美術に関する調査研究

(2) 展覧会のための調査研究

クレイワークに関する調査研究
鳴剛に関する調査研究
高柳恵里に関する調査研究
ヤノベケンジに関する調査研究
川崎 清に関する調査研究

(3) 科学研究費補助金による調査研究

「大阪における近代商業デザインの調査研究」(基盤研究 代表 宮島久雄)
「四大(地・水・火・風)の感性論」研究分担(基盤研究 代表 岩城見一)
「イタリアにおける美術作品の保存・修復の思想と歴史 - 欧米各国との比較から」
研究分担(基盤研究 代表 岡田温司)

(4) その他(講演会、セミナー等での発表)

別紙「調査研究一覧」参照

2. 客員研究員等の招聘実績(年度計画記載人数: 1人)

客員研究員1名を招聘し、以下の調査研究を行った。

- ア. 紙支持体作品の保存に関する調査研究
- イ. 現代美術作品の保存に関する調査研究

3. 調査研究費 予算額 21,955,000円 決算額 20,681,168円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

年度計画に基づき、現代美術及び展覧会等に関する調査研究を行った。現代美術の調査研究については、当館広報誌である月報への発表7件をはじめ18件の発表が行われ、展覧会のための研究についても、展覧会図録及び月報を中心に、論文、年譜、参考文献など12件の発表を行うなど、積極的に研究成果の発表に努めた。

さらに、講演会やセミナーにおいても、積極的に研究成果の発表に努め、7件の発表を行った。

また、科学研究費補助金による調査研究についても積極的に取り組み、着実に成果を上げることができた。

*添付資料 調査研究一覧(事業実績統計表 p.114)

4 . 教育普及

- (1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。
- (1)-2 収藏品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (1)-3 国内外の美術館等との連携を強化するとともに、資料室等の整備・充実を図る。
- (2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。
また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
- (3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。
それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。
また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。
- (4)-1 美術館・博物館関係者等を対象とした研修プログラムについて検討、実施する。
- (4)-2 全国の公私立美術館等の学芸担当職員（キューレーター）の資質を向上し、専門性を高めるための研修を実施し、人材養成を推進する。
- (4)-3 公私立美術館・博物館等の展覧会の企画に対する援助・助言を推進する。
- (4)-4 公私立美術館・博物館等が実施する研修会への協力・支援を行うとともに、情報交換、人的ネットワークの形成に努める。
- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。
また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収藏品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。
- (6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。
- (6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

方 針

常設展示や企画展示などによる現代美術の紹介を補うため、多角的に美術に親しんでもらうための教育活動を行うとともに、インターンやボランティア制度の導入により、新館移転後の新しい教育普及活動のあり方についても検討を行った。

実 績(総括表)

- (1) - 1 資料の収集及び公開
収集件数 993件
公開場所 一般への公開は行っていない。
- (1) - 2 広報活動の状況
刊行物による広報活動 10種 30冊
ホームページによる広報活動
展覧会情報を中心に、各種教育普及事業の開催計画を掲載し、館の活動について積極的な情報発信を行うとともに、新館に関する情報提供にも努めた。
マスメディアの利用による広報活動
展覧会情報や館の活動状況について、マスメディアに対する積極的な情報提供を行うとともに、取材や撮影依頼にも可能な限り対応した。
- (1) - 3 デジタル化の状況
平成15年度にデジタル化した美術作品の件数
・文字データ 484件
・画像データ 357件
・図書データ 3,434件
- (2) - 1 児童生徒を対象とした事業
こどものためのワークショップ 4回 157人
ビデオ上映 1回 43人
- (2) - 2 講演会等の事業
講演会 9回 1,416人(対談3回:564人を含む。)
ギャラリー・トーク 6回 703人
ビデオ上映 4回 63人
- (3) - 1 大学等との連携
大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を行った。
インターンの活用状況
平成15年度は3名(大学院生及び修了者)を受け入れ、学芸業務全般にわたって従事させた。
- (3) - 2 ボランティアの活用状況
平成15年度は41名(大学生)を受け入れ、美術館業務の補助業務に従事させた。
- (4) 渉外活動
館の業務充実を図るため、展覧会への寄付金支援をはじめ、経済団体等からの支援方策について検討を行った。
- (5) 教育普及経費 予算額 30,529,800円 決算額 30,764,229円

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

子供たちを対象としたワークショップやビデオ上映などは、当館のユニークな活動として定着した。また、講演会、ギャラリートークなども、現代美術への理解をうながす好機として、多くの参加者があった。

さらに、平成15年度から導入したインターン、ボランティア制度は、美術館における新しい教育普及活動のあり方を探るうえにおいても、非常に有意義な事業活動であったといえる。

なお、インターン1名がポーラ美術館の学芸員として採用されたことは、当館にとっても喜ばしいことであった。

*添付資料

教育普及件数の推移 (事業実績統計表 p.16)

(1) - 1 資料の収集及び公開(閲覧)の状況

中期計画

(1)-1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料及び国内外の美術館・博物館に関する情報及び資料について広く収集し、蓄積を図るとともに、レファレンス機能の充実を図る。

実績

1. 収集

件数 993件

2. 公開

一般への公開は行っていない。

自己点検評価

中期計画に基づき基礎資料等の収集に努め、前年に引き続き、現代作家研究の基礎となるカタログ、レゾネを中心に収書を行った。

なお、一般入館者への公開については、施設と人員の制約から実施していないが、研究者に対しては資料として公開してきた。

新館移転後は、情報コーナーの活用方法を含め、資料の公開についても検討を進めていきたい。

(1) - 2 広報活動の状況

中期計画

- (5)-1 収集、保管、修理、展示、教育普及、調査研究その他の事業について、要覧、年報、展覧会図録、研究論文、調査報告書等の刊行物、ホームページ、またはマスメディアを利用して広く国民に積極的に広報活動を展開するとともに、国立美術館への理解の促進を図る。また、その内容について充実を図るよう努力するとともに、4館共同による広報体制の在り方について検討を行う。

実績

1. 広報誌名

(1) 年報「平成14年度版」

発行年月日 1回発行(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関及び関係者

(2) 概要

発行年月日 1回発行(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関及び関係者 会場内配布, 修学旅行野計画のための学校等

(3) 図録

発行年月日 3回発行

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関及び関係者

(4) リーフレット

発行年月日 2回発行

料金 無償

配布先 会場内及び広報普及先の各機関

(5) ジュニアガイドブック

発行年月日 1回発行(年度計画記載発行回数1回)

料金 無償

配布先 会場内及び近隣の教育関係機関

(6) 月報

発行年月日 12回発行(年度計画記載発行回数12回)

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関及び関係者

(7) ポスター、チラシ(展覧会関係)

発行年月日 6回発行(発行回数6回)

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関

(8) チラシ(子どものためのワークショップ用)

発行年月日 2回発行

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関

(9) ポスター(移転広報用)

発行年月日 1回発行

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関

(10) 新館建築概要リーフレット

発行年月日 1回発行

料金 無償

配布先 広報普及先の各機関

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

中期計画及び年度計画に基づき、美術作品及び当館の活動内容について国民の理解促進を図るため、各種発行物の刊行により、幅広い年齢層に対する普及広報活動に努めた。また、ホームページの内容充実を図るなど、より積極的な広報活動にも努めてきた。

移転に際しては、移転先の大阪・中之島を広く認知してもらえるよう、版画家の山本容子デザインによる移転広報用ポスターや新館施設の概要を紹介したパンフレットを作成し、竣工式で配布した。今後、引き続き普及広報関係機関を中心に配布していく予定である。新館移転後は、普及広報活動の内容についても必要に応じた見直しを進めながら、より効果的な活動を継続していきたいと考えている。

なお、事業実績をまとめた年報については、年度当初の速やかな発刊に努めた結果、評価会議等の場において、当館の平成14年度事業結果をいち早く周知させる資料として、大いに活用できていることは有意義である。

(1) - 3 デジタル化の状況

中期計画

- (1)-2 収蔵品等の美術作品その他関連する資料の情報について、長く後世に記録を残すために、デジタル化を推進する。
- (5)-2 国内外に広く情報を提供することができるホームページについては、教育普及など多様な活用ができるようコンテンツを工夫し、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度のアクセス件数以上となるよう努力する。
- (5)-3 デジタル化した収蔵品等の情報について、美術情報システム等により広く積極的に公開するとともに、その利用方法について検討する。
また、デジタル情報の有料提供についての方策を検討する。

実 績

1. 所蔵作品のデジタル化
平成15年度にデジタル化した美術作品の件数
文字データ 484件、画像データ 357件
平成15年度末収蔵作品数 5,012件(寄託作品27件を含む。)
平成15年度末デジタル化作品数 文字データ 4,985件、画像データ 2,065件
今後のデジタル化の対応 毎年 件をデジタル化予定
2. ホームページのアクセス件数(平成12年度アクセス件数 182,218件)
412,690件
3. デジタル化した情報の公開
HP等による公開件数 230件

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】
所蔵作品にかかる文字データの入力、平成15年度の新購入・寄贈作品を含め、全てのデータ入力完了している。画像データについては、各作品について著作権をクリアしなければならないが、平成15年度においてもこの問題に重点的に取り組み、その結果として357件のデータ入力を行うという成果をあげることができた。

(2) - 1 児童生徒を対象とした事業

中期計画

(2) 新学習指導要領、完全学校週5日制の実施等を踏まえ、学校、社会教育関係団体と連携協力しながら、児童生徒を対象とした美術品解説資料等の刊行物の作成、講座、ワークショップ等を実施することにより、美術作品等への理解の促進、学習意欲の向上等を促し、心の教育に寄与するような教育普及事業を推進する。

また、児童生徒を対象とした事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

実績

1. 事業名 子どものためのワークショップ

開催期間

ア. 平成15年 8月23日(1日間)(開催場所:地階講堂)

イ. 平成15年 9月15日(1日間)(開催場所:地階講堂、万博記念公園)

ウ. 平成15年11月 1日(1日間)(開催場所:地階講堂)

エ. 平成15年11月15日(1日間)(開催場所:地階講堂)

参加者数(平成12年度実績 人)

157人(97人)

担当した研究員数 4人

事業内容 現役作家と子供たちが直接交流できるワークショップ

2. 事業名 子どものためのビデオ上映

開催期間

ア. 平成15年 5月24日(1日間)(開催場所:1階ロビー)

参加者数(平成12年度実績 人)

43人(53人)

担当した研究員数 1人

事業内容 子供たちに現代美術に親しんでもらうためのビデオ上映会

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

ワークショップについては、万博ツアーや作家自身との共同制作など、アーティストのユニークなプログラムが子ども達に大変好評であった。また、事業実施のためのリーフレットを作成したり、ホームページを利用するなど、広報活動にも積極的に取り組んだ。

【見直し又は改善を要する点】

ワークショップ専用のアトリエスペースがなく、企画や使える資材にも制約があった。新館移転後の事業計画については、対応人数も含め、今後の検討課題としていきたい。

(2) - 2 講演会等の事業

中期計画

(3) 美術作品に関し、その理解を深めるような講演会、講座、スライドトーク及びギャラリートーク等を実施する等、生涯学習の推進に寄与する事業を行う。

それらの事業について、中期目標の期間中毎年度平均で平成12年度の実績以上の参加者数の確保に努める。

また、その参加者に対しアンケートを行い、回答数の80%以上から、その事業が有意義であったと回答されるよう内容について検討し、さらに充実を図る。

実績

1. 講演会

9回(対談3回を含む。)(年度計画記載回数:4回)

開催期間 9日間(延べ9回)

開催場所 講堂及び展示場

参加者数 1,416人(延べ人数)(平成14年度実績 7回:883人)

担当した研究員数 9人(延べ人数)

事業内容 展覧会に合わせた講演会及び現代美術に関する普及事業

アンケート結果(回答数 件)	・良い % (件)	・普通 % (件)	・悪い % (件)
120件	・良い 42% (50件)	・普通 50% (60件)	・悪い 8% (10件)
150件	・良い 93% (140件)	・普通 7% (10件)	・悪い 6% (9件)
150件	・良い 81% (122件)	・普通 13% (19件)	・悪い 6% (9件)
90件	・良い 93% (84件)	・普通 7% (6件)	・悪い 0% (0件)
120件	・良い 94% (113件)	・普通 6% (7件)	・悪い 0% (0件)
94件	・良い 85% (80件)	・普通 15% (14件)	・悪い 0% (0件)
86件	・良い 87% (75件)	・普通 13% (11件)	・悪い 0% (0件)
256件	・良い 80% (206件)	・普通 20% (50件)	・悪い 0% (0件)
350件	・良い 57% (200件)	・普通 43% (150件)	・悪い 0% (0件)

2. ギャラリートーク

6回(年度計画記載回数:7回)

開催期間 6日間(延べ6回)

開催場所 講堂及び展示場

参加者数 703人(延べ人数)(平成14年度実績 6回:327人)

担当した研究員数 6人(延べ人数)

事業内容 展示作品の解説

アンケート結果(回答数 件)	・良い % (件)	・普通 % (件)	・悪い % (件)
50件	・良い 84% (42件)	・普通 16% (8件)	・悪い 0% (0件)
44件	・良い 89% (39件)	・普通 11% (5件)	・悪い 0% (0件)
80件	・良い 94% (75件)	・普通 6% (5件)	・悪い 0% (0件)
50件	・良い 70% (35件)	・普通 30% (15件)	・悪い 0% (0件)
304件	・良い 82% (250件)	・普通 18% (54件)	・悪い 0% (0件)
175件	・良い 86% (150件)	・普通 14% (25件)	・悪い 0% (0件)

3. ヴィデオ上映

4回(年度計画記載回数:4回)

開催期間 4日間(延べ4回)

開催場所 1階ロビー

参加者数 63人(延べ人数)(平成14年度実績 5回:164人)

担当した研究員数 1人

事業内容 展示作品の解説

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

展覧会にあわせた教育普及事業として、講演会や対談、ギャラリー・トークなどを積極的に実施した。現代美術を扱う展覧会において、作家自身による講演会や対談などは、出品作家の生の声に触れることができる貴重な機会であった。また、展覧会ごとにギャラリー・トークを実施し、担当学芸員が展示場内で作品を見ながら分かりやすく解説を行うとともに、来館者が感じた疑問や感想などを直接フィードバックできる、恰好の機会ともなっている。今後も、現代美術に関する教育普及事業として、充実した内容を検討しながら継続していきたいと考えている。

(3) - 1 大学等との連携

中期計画

大学等と連携し、大学院生や大学生を受け入れ、美術作品に関する実習等について検討、実施する。

実績

1. 博物館実習生

受入期間 平成15年 7月28日～平成15年 8月 3日(7日間)

開催場所 国立国際美術館

参加者数(平成12年度実績 人)

19名(21名)

担当した研究員数 7人

事業内容

大学生の学芸員資格取得のための博物館実習

その他

美術館の事業活動に応じたカリキュラムを作成し、できるだけ日常業務を体験する形での実習を実施した。

2. インターンシップ制度の実施

受入期間 平成15年4月1日～平成16年3月31日

開催場所 国立国際美術館

参加者数

3人(0人) 平成15年度からの新規事業

担当した研究員数 7人

事業内容

美術作品や美術史、あるいは美術館の活動や学芸員の業務に関心を持ち、それらを研究し、将来美術に関わる仕事に就きたいと強く希望する者(大学院生または大学院修了者)に対し、より具体的、実践的な知識を習得してもらうことを目的とした実務研修

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

博物館実習については、インターンの協力を得ながら、展示会の展示作業の見学、来館者の前でのギャラリートーク実習、ワークショップの実習など、幅広い実体験の場を提供することができ、双方にとって有意義な実習となった。

インターンシップについては、学芸員との日常的な実務研修を通じ、各自の専門的知識の向上、経験の蓄積は勿論のこと、館にとっても、今後の新しい教育普及事業のあり方を探るうえにおいて、有意義な事業活動であった。

【見直し又は改善を要する点】

現施設では、スペースの面から限られた人数にしか対応できなかった。新館移転後は、受け入れ人数を含め実習及び研修の進め方について、さらなる検討を進めていきたい。

(3) - 2 ボランティアの活用状況

中期計画

(6)-1 ボランティア等や支援団体を育成し、ボランティア等と連携協力して展覧会での解説など国立美術館が提供するサービスの充実を図る。

実績

1. 登録人数 41人

2. 活動内容

展覧会ごとに実施する教育普及事業（講演会、ギャラリートーク等）の補助業務を中心に、各種広報物の発送及び図書資料を含む各種資料等の整理補助業務に従事した。

3. 今後の取り組み

移転作業の補助業務に従事してもらいながら、移転後の教育普及事業のあり方を含め、新たな活動分野の開拓に努めていきたい。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取り組み】

スタッフ数の少ない当館において、各種教育普及事業を実施する際の補助者として、ボランティアに協力いただけたことは、参加者に対するきめ細かいサービスにもつながり非常に有益であった。

また、広報物の発送作業においても迅速な処理ができ、有効な広報活動につながった。

【見直し又は改善を要する点】

現施設では、スペースの面から限られた人数にしか対応できなかった。新館移転後は、受け入れ人数を含め活動分野の新たな開拓に努めながら、ボランティア制度充実の方策について、さらなる検討を進めていきたい。

(4) 渉外活動

中期計画

(6)-2 企業との連携等、国立美術館の業務がより充実するよう今後の渉外活動の方針について検討を行う。

実績

下記のとおり、展覧会助成として2件の寄附金を受け入れた。

「ヤノベケンジ - MEGAROMANIA - 」(企画展)

キリンビール株式会社から、1,000,000円を受け入れ。

資生堂から、800,000円を受け入れ。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

館の業務充実を図るため、展覧会に対する助成団体への申請を積極的に行い、平成15年度は2件の助成支援をいただいた。館の事業をより充実したものとするために、有効な方策であると考えられるので、今後も積極的に取り組んでいきたい。

【見直し又は改善を要する点】

大阪市内への移転後は、これまで以上に教育普及・広報宣伝が重要との認識から、館の支援団体としての「友の会」の設立や、経済団体との関わり方について、引き続き検討を進めていきたい。

5 . 新たな美術館の運営に向けた取り組み

中期計画

国立国際美術館新館については、平成16年の移転に向けて、体制整備、展示等の実施準備を進め、開館後は円滑な事業実施に努める。具体的な管理運営のあり方等については開館までに検討を進める。

実 績

館長の優れたリーダーシップのもと、学芸課、庶務課の職員が一丸となり、平成15年度の事業活動を実施しながら移転に向けた準備を着実に進めてきた。

新館における管理運営のあり方等については、各部会が相互に連携を取りながら検討を進め、移転後の円滑な事業実施に向け準備を進めてきた。

自己点検評価

国土交通省に対し、新館建築等の支出委任をしていたことから、工事の進捗状況等の連絡調整に苦労した。

また、新館における管理運営等の具体的な事項については、移転から開館までに若干の期間があることから、今後も引き続き検討を進めながら、円滑な事業実施に向け万全を期したい。

6. その他の入館者サービス

中期計画

- (1)-1 高齢者、身体障害者等の利用にも配慮した快適な観覧環境を提供するため、各館の方針に従って展示方法、表示、動線、施設設備の工夫、整備に努める。
- (1)-2 入館者サービスの充実を図るため、観覧環境の整備プログラム等を策定し、計画的な整備を行う。
- (1)-3 一般入館者を対象とする満足度調査及び専門家からの批評聴取等を定期的実施し、調査結果を展示等に反映させるとともに、必要なサービスの向上に努める。
- (1)-4 展示解説の内容を充実させるとともに、見やすさにも配慮する。また、音声ガイドやハイビジョン等を活用した情報提供を積極的に推進し、入館者に対するサービスの向上を図る。
- (2) 入館者のニーズを把握、分析し、夜間開館の実施等開館時間の弾力化や小中学生の入場料の低廉化など、入館者へのサービスを心がけた柔軟な美術館展示活動等を行い、気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努力する。
- (3) ミュージアムショップやレストラン等の施設を充実させるなど、入館者にとって快適な空間となるよう館内環境を工夫する。

実績

1. 高齢者・身体障害者のための施設整備等 (1)-1
 - 障害者トイレ 1個所(1階 1個所)
 - 障害者エレベータ 2基
 - 段差解消(スロープ) 1個所(正面玄関)
 - 貸出用車椅子 6台(1階)
2. 観覧環境の充実 (1)-2、(1)-4

展示作品リストを含めたリーフレットを無料配布するとともに、館内にビデオテークを設置し、情報提供を行った。
3. 夜間開館等の実施状況 (1)-3
 - (1) 夜間開館実施状況
 - ア. 開催日数 0日間
 - イ. 入館者数 人(総入場者数 人, 夜間開館入場率 %)
 - ウ. 実施日
 - (2) 小中学生の入場料の低廉化

平成15年度についても、平成14年度と同様に特別展を含めた全ての展覧会において、小・中学生の観覧料を無料とした。
 - (3) (2)以外の入場料金の取り組み方

ア. 学生料金を大学生料金と高校生料金に分け、高校生料金の低廉化を実施した。
 - (4) その他の入館者サービス

「川崎清 美術館建築とその周辺」展では、夕間に浮かぶ幻想的な外観を作品の一つとして鑑賞してもらえるよう、毎週金曜日の閉館時間を1時間延長した。

また、高齢者に配慮して、拡大鏡(ルーペ)を受付に配置し、希望者に貸出しを行った。
4. アンケート調査(1)-3
 - 調査期間 平成15年 4月10日～平成15年 4月13日(4日間)
 - 平成15年 6月12日～平成15年 6月15日(4日間)
 - 平成15年 8月 7日～平成15年 8月10日(4日間)
 - 平成15年10月 9日～平成15年10月12日(4日間)
 - 平成15年12月11日～平成15年12月14日(4日間)
 - 調査方法 入館時にアンケート用紙を配布し、任意で提出を依頼した。
 - アンケート回収数 237件
 - 233件
 - 297件
 - 639件
 - 420件

アンケート結果

・良い	55%	(131件)	・普通	44%	(103件)	・悪い	1%	(3件)
・良い	45%	(105件)	・普通	53%	(123件)	・悪い	2%	(5件)
・良い	47%	(138件)	・普通	51%	(152件)	・悪い	2%	(7件)
・良い	47%	(301件)	・普通	51%	(323件)	・悪い	2%	(15件)
・良い	44%	(184件)	・普通	54%	(228件)	・悪い	2%	(8件)

5. 一般入館者等の要望の反映 (2)

アンケート結果の分析を行い、可能なものから改善に努めるとともに、新館運営に向けて参考とした。

6. レストラン・ミュージアムショップの充実 (3)

現代美術をより親しく感じてもらえるよう、販売グッズの内容を検討し、充実に努めた。

自己点検評価

【良かった点、特色ある取組み】

当館では、展示空間の在り方が展示作品に大きく反映する現代美術を扱うため、展示場内に解説パネル類を掲示することができない。これは、作品自体を十全な状態で鑑賞してもらいたいという配慮からであるが、一方では来館者から、解説パネルを望む声や作品キャプションを大きくして欲しいとの声も聞かれる。そのような声に応えるため、各展覧会ごとに展示作品リストを含めたリーフレットを無料配布するなど、鑑賞環境の充実に努めた。

また、万博公園内にある施設という特殊事情から、ゴールデンウィーク中の休館日の臨時開館や万博公園無料デーに伴う入館料無料日の設定、その他、関西文化の日事業への参加協力に伴う2日間の常設展無料日の設定や当館閉館記念事業に伴う2日間の無料入館日の設定など、さまざまな入館者サービスに努めた。

新館移転後の入館者サービスについては、これまでのアンケート結果の分析を踏まえ、さらなる充実を目指し検討を進めていきたい。